



Title	5 . フォーマリティーの違いに適応できる日本語運用力獲得への試み
Author(s)	延与, 由美子
Citation	北海道大学国際教育研究センター紀要, 20, 52-65
Issue Date	2016-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65695
Type	bulletin (article)
File Information	toku_JISCHU20_5.pdf



[Instructions for use](#)

5. フォーマリティーの違いに適応できる日本語運用力獲得への試み

延 与 由美子

1. 授業の背景

北海道大学における日本語上級レベルでは、平成28年度第2学期よりモード別学習が適用され、「やりとり」モードの3つのトピック別上級科目の1つとして「上級やりとり（インタビュー・プロジェクト）」が始められた。本稿は、本授業に関する1学期間の実践報告である。

本授業におけるインタビューとは、いわゆる仕事の面接（job interview）ではなく、対面による質問でインタビュー参加者の回答を集める作業を指す。このようなインタビューを上級日本語学習の中心活動とするカリキュラムは、寡聞にして知らないが、例えば日本人学生を対象とした教科書としては『インタビュー実践！』（亜細亜大学経営学部、2015）がある。ここでは就業力をテーマに、学習者が社会人対象のインタビューを通して様々な仕事についての情報を集め、卒業後の就職に備えることを目的としている。前掲書では、その就業力を「聴きとる力、文章を作る力、行動する力、自立する力、生き抜く力」の5つと規定し、インタビュー後のレポート作成とプレゼンテーションといった活動を通じ、日本人学生が社会人として必要とされる能力を総合的に養うことを目指している。

さて、社会に対応できる能力が必要であることは、上級日本語学習者においても明白であろう。上級日本語学習者の課題のひとつとして、多様な背景を持つ日本語話者に対応する日本語能力の構築が挙げられる。例えば「CEFR共通参照：全体的な尺度」でも、Cレベルでは、社会的な目的に応じた柔軟な対応ができることが「熟達した言語使用者」の条件であるとされる（国際交流基金、2015）。また、Oral Proficiency Interviewのguidelineにおいても、上級レベルの要件としてインフォーマル・フォーマルの両方の状況で対処できることが試される（ACTFL、2012）。そのため、上級の学習では、教室内での学習者同士あるいは担当講師とのやりとりに留まらず、様々な相手に合わせられる言語能力や、またより改まった場面でのコミュニケーション能力養成のための活動が必要であると考えられる。殊にインタビュー活動では、非礼と取られない態度、レポートの構築、場に合った的確な質問の仕方、聞く態度、会話をコントロールするための

話し始めと話し終わりの区切りの付け方などが、上級学習者に要求される言語能力を養う活動として期待される。

2. 授業の目的・目標

「北海道大学日本語スタンダード2016年度版」に示された上級やりとり科目の言語行動目標は「相容れない話題や場面において、平等に意見を共有しつつ、もっとも効果的な方法で議論し合って相互理解を導くことで、共通の目的の達成に寄与することができる」ことである。その言語行動目標を達成するための具体的なスキルは、以下の3点である。

- (1) 複合的に絡み合ったり相互の主観がぶつかり合う状況を回避することなく、積極的に対応することができる。
- (2) 立場の違いによる主張を交渉、説得、調整しながら、ファシリテーターとしての役割を果たすことができる。
- (3) 他人の意見やコメントに柔軟に反応し、的確な質問・コメントを行うことで、全体の円滑な進行に役立てることができる。

以上のようなスキルを用いた授業活動のアウトカムは、以下の通りである。

- (1) 政治姿勢や差別などの諸社会問題、また利害が相反する場面などで、各自の意見を必要十分な程度で出し合い、まとめることができる。
- (2) 感じの良い話し方を用いて、使用する文脈とその効果を十分に理解したうえで言葉を駆使し、やりとりを促進、活性化することができる。
- (3) 相手の意見に上手に反論・訂正でき、さらに相手の反応に応じて自分の話し方を適切に変えながら、関係改善に向けてやりとりを操作することができる。

以上のスキル及びアウトカムから、上級やりとり科目の授業では「ロールプレイ」「ディベート」「インタビュー・プロジェクト」の三つの科目が設定された。他コースとスキル・アウトカムの配分を検討した結果、「インタビュー・プロジェクト」としてのスキル・アウトカムは以下の通りとなっている¹⁾。

授業の目標「与えられた場面・関係性・状況の中で、最も効果的な方法で議論しあい、相互理解を導くことにより、共通の目的の達成に寄与することができる」

到達目標「相手との関係性に配慮しながら、相手の意見に上手に反論・訂正でき、さらに相手の反応に応じて自分の話し方を適切に変えながら、関係改善に向けてやりとりを操作することができる」

本授業の目標と到達目標達成のために必要とされる学習項目は、以下の3点に集約されると考える。まず、(1)多様なフォーマリティー・レベルや心的距離感に対応できる言語バラエティーの使用である。上級学習者には、いわゆる友達言葉は得意ではあるが、ややフォーマルなコミュニケーションが苦手なタイプや、逆に改まったコミュニケーションの方が得意であるタイプが少なからず存在する。また、全体に敬語に対する苦手意識が強い学生が多い。更に、相手との心的距離感という点では、見知らぬ人との緊張度の高いコミュニケーションと、クラスメートとの話し合いとは、全く異なるものである。上級学習者としては、このうちどのような状況でも対応でき、また同じ相手であっても発話内容などにより親疎の使い分けができるような、柔軟な言語能力の養成が望まれる。次に、(2)和やかな人間関係形成のためのコミュニケーション・ツールの獲得である。言語に関する知識が豊富であっても、相手と良い関係性が築けない学習者は、良いコミュニケーターとはみなされず、上級者であるが故になおのこと社会性が疑問視される。相手に好感を持たれるような話し方、聞き方は、上級学習者にとって必須である。最後が、(3)目的達成のためのツールとしての言語使用である。社会生活上必要とされる言語運用能力は、単に質疑応答のみで構成できるものではなく、言語による交渉、企画、討議による内容の吟味と収斂、発信などを含む、いわば総合力であることは、言を俟たない。そのためには、あるプロジェクトを最初から最後まで自分たちで計画し実行していくような、まとまった活動が必要である。近年、授業活動を社会とつなげる活動が脚光を浴びているように、特に上級学習者の場合、日常会話から脱してより複雑な言語使用を目指すことは、将来の就職や研究活動などの社会活動に向けての重要な段階である。

以上の3つの言語能力養成に共通するのは、主体的な言語使用、つまり話者の自覚的言語知識の選択と運用である。そのため授業活動にも主体的言語使用を誘発する経験を含む仕掛けづくりが必要となる。従来の授業内活動を主軸にする授業形態は、講師の介在により受講生がその場で必要な知識を得る上で有益である。しかし、主体的な言語使用者を目指すには、受講生が独力で場に必要とされている言語表現を選択し、臨機応変に対応

していく経験も重要である。例えば、上記(1)の多様なフォーマリティー・レベルの学習は、教室内のロールプレイや外部からの参加者を巻き込んだ教室活動で模擬練習が有効だ。しかし、その先に「教室」という文脈から離れた授業外活動を目標として設定すると、授業内の練習を実際に生かした経験を得ることができる。一方で、教室外活動は担当講師による見守りや修正などを欠くため、目が行き届かないきらいがある。また、受講生にとっても、いきなりの教室外活動は、事前の教室内での指導があったとしても、戸惑いや失敗経験による不安感の増幅が起こっても不思議ではない。

そこで、本授業では、3つの異なるインタビュー活動を通じて、異なるフォーマリティー・レベルや相手との親和度、インタビュー状況を、段階的に経験していくという構成を採用した。それぞれの段階では受講生自身が自らの経験をふりかえり、また他の受講生の経験を観察することで自らに不足している点を学びあう。一方で、講師もふりかえり活動に参加することで、受講生がその場で必要としている言語知識を伝える。更に、クラス活動としてインタビューを目的のある活動にするために、クラス全体で共通したテーマに基づく質問を行い、結果をまとめることによって、問題解決能力の構築を目指した。

以下に、2016年度第1学期に行われた授業の実施内容をまとめたい。

3. 授業の実践内容

本授業は2016年4月中旬から8月中旬にかけて、週一回1時間半、計16回開講された。受講生は21名で、その内訳はアジア系15名、欧米系5名、南米系1名である。

授業内容の骨子は、以下の通りである。

(1) 3段階のインタビュー・プロジェクトの実施

授業では表1にあるような3段階のインタビュー・プロジェクトを実施した。

1段階目はウォームアップ活動としてのクラスメートとの1対1のインタビューであり、以下クラス内インタビューと称する。この段階では、クラスメートとのレポート構築により、その後のグループ活動につながる、助け合える人間関係作りも目指した。2段階目は初対面の日本人学生との教室外での1対1のインタビューで、本稿では日本人学生インタビューと呼ぶ。ここでは、クラス内インタビューにはなかった人間関係の構築の過

表1 3段階インタビュー活動の概要

段階	形態	授業内/外活動	中心とする文体等	学習期間
① クラス内 インタビュー	1対1	授業内	常体	4週
② 日本人学生 インタビュー	1対1	授業外	敬体	4週
③ 社会人 インタビュー	4対1	授業外	敬体（敬語を含む）	8週

程を学んだ。担当講師によって指示されたインタビュー相手と、メール交換しながらインタビューの日程や場所を交渉し、ある程度の緊張感のあるインタビューを授業外活動として実施した。最終段階として、見知らぬ目上の日本人1人に対して4人程度の受講生がグループとなって、インタビュー日時などをメールで交渉し、敬語使用を含む改まった形のインタビューを教室外活動として行った。これを社会人インタビューと称する。この段階的な学習により、各受講生が苦手な場面や言語行動を少しずつ克服していくことを目指している。特に、場や状況に合った文体の選択や、話し言葉と書き言葉の使い分け、丁寧な対応などが、状況に応じて使えることが重点目標として挙げられる。いずれの授業外活動も、講師は同席しない。各段階にかけた回数は、ふりかえり活動と次の活動の導入との重複もあるが、おおよそ1、2段階目がそれぞれ4週、3段階目が8週である。

(2) 言語活動として流れのあるインタビュー経験の構築

第1段階のインタビューでは、レポートがやや形成されている段階からの活動となるが、他のインタビューでは、自己紹介に始まり、インタビュー実施後のお礼に終わる流れとなる。実際のインタビュー活動以外のコミュニケーション手段は、メールを媒体とし、そのメール交換のコピーを講師に送ることを課題の一環とした。以下はおおまかな活動の流れである。尚、インタビューの種類により、練習段階の録音や文字化課題は省略したものもある。

- ①（授業内）インタビュー質問に関する討議
- ②（授業外）インタビュー相手とのメール交換（自己紹介、インタビュー実施日時の交渉など）
- ③（授業内）ロールプレイ練習と録音
- ④（授業外）自分のロールプレイ練習の文字化

- ⑤ (授業内) ロールプレイ練習のふりかえりと修正、クラスでの共有
- ⑥ (授業内/外) インタビュー本番の実施、録音
- ⑦ (授業外) 実施した自分のインタビューの文字化、インタビュー相手へのお礼メール送付
- ⑧ (授業内) インタビュー結果のクラス内共有
- ⑨ (授業外) 他の受講者インタビューへのフィードバックレポート作成
- ⑩ (授業内) 自分のインタビューのふりかえりと修正、講師による評価

(3) クラス内の話し合いによる、目的のあるプロセスの重視

それぞれのインタビュー活動で使用する質問は、授業前に各学生が考えた質問を Dropbox の Excel 表に入力することで、受講生の多くがインタビュー相手 (クラスメート、日本人学生、社会人) に聞きたいことを抽出した。授業では内容を集約し、多数決で3つほどの質問にまとめた。ただし、社会人インタビューでは、クラス共通の質問は2つとし、グループ独自の質問として、インタビュー相手の経歴や仕事内容に関するものを2つ用意した。インタビュー終了後は、授業内でインタビュー結果をまとめ、共有し、全体的な傾向を確認した。

(4) レポート形成のための聞く態度、聞きとる態度の重視

全てのメールやりとり及びインタビューは録音し、Dropbox を利用して授業の中で共有した。他の受講生のインタビューから、場で求められる丁寧さに関わる表現や、「あいづち」など相手の話を聞いているというサインが出せているかなど、レポート形成に関わる聞く態度を学んだ。次に、更に内容を深め、より詳細な内容を聞き取るための追加質問について検討した。最後に、インタビューの流れを主体的に構築するツールとして、どのような点が話し合いを円滑にしているか、あるいはどのような工夫がインタビュー運びに有効であるか、話題の転換など流れを作る表現やコメントによるまとめなどの重要性を強調した。

聞く態度の養成に関しては、クラス全体や受講生同士のふりかえり活動での具体的な指摘の積み重ねで、出来る限りお互いの気づきを活用するように努めた。例えば日本人学生インタビューの後、受講生同士の評価の中に、「自分の話がが多く、誰のインタビューかわからなくなっている」という指摘があった。その後の全体指導では、インタビューは相手の意見を調査することが目的であり、自分の意見を述べる場ではないことを強調した。特に目上の人へのインタビューでは、非礼に当たると指摘したところ、社

会人インタビューではかなり改善されていた。

(5) ふりかえり活動としての録音内容の文字化課題

受講生は、録音した自分の音声を文字起こしすることが課せられた。これを講師が添削することにより、自らの言語上の誤用や理解不足、またインタビュー相手の発話で不明な点が可視化された。また、この文字化原稿を録音と共に Dropbox で共有することで、他の受講生の音声を聞きながら学びあう協働型学習を、より効果的に行うことを目指した。具体的には、例えば日本人学生インタビュー後、各自が指定された2名のインタビューについて、良い点と改善すべき点を箇条書きにすることを課題とし、次の授業でその内容をコピーでインタビューを実施した本人に渡し、ふりかえりの材料とした。その中から適切な指摘を講師が拾い、全体で音声を聞きながら共有した。例えば、話のはずまない相手にどのような質問をすると話が進展していったかを示す例や、あるいは、相手の発言の一部を繰り返すことで相手に対する共感が強調されて話しやすい環境が構築されている例など、具体的なやりとりのストラテジーを授業で共有することができた。その際、スクリプトをスクリーンに映しながら確認するため、上級クラスで散見される、受講者間の日本語習熟度のギャップを埋めることも期待できる。

ただし、文字起こしにあまりに時間が取られないよう、録音時間は20分を上限とした。同時に、受講生のインタビュー時間の管理を促すことで、冗長なおしゃべりを避けるよう心掛けさせた。

(6) 仲介役・ファシリテーター役・フィードバック役としての担当講師

講師は、インタビュー実践のために、クラス内の話し合いのファシリテーターとなり、インタビュー質問の取りまとめや、Dropbox の設定と管理の役を負った。仲介役としての日本人学生のボランティア集めは、日本人と留学生との協働活動科目の「多文化交流科目」や、グローバル人材育成プログラムの「新渡戸カレッジ」に関わる講師・スタッフの方々に依頼した。参加を希望する新渡戸カレッジ生が、担当講師である筆者にメールを送るという形式を採り、募集人数を上回る応募があった。社会人インタビューに関しては、知り合いの学内外の日本語教師、海外生活経験者、スタッフの方の合計5名にお願いした。インタビュー前の準備学習では、必要な語彙・表現を紹介したほか、フィードバックとして受講生のインタビュー音声と文字起こし、メールやりとりから、必要と思われる修正や助言を行っ

た。修正は、MS Word あるいはPDFで提出された文字起こし原稿にコメントや変更履歴ツールで行い、受講生本人に返却し、必要に応じて個別にアクセントやイントネーション、文法上の問題などを口頭で説明した。

(7) 成果物と生教材、授業運営のための教材の使用

受講生同士が言語・非言語知識を分かち合うという学習活動は、最も習熟した受講生にとって得るところが比較的少ないという問題点があり、また受講生間での誤解の容認や増幅という可能性もはらんでいる。担当講師のフィードバックも、単調な間違い探しに終始する可能性もある。

そのため、適宜インターネットやテレビ番組など生教材を、場に求められる丁寧さの確認や、インタビュー活動に有効な表現例などの紹介のために使用した。例えば、クラス内インタビューから日本人学生インタビューへ移行した際、『Voices from Japan ありのままの日本を知る・語る』（永田2016）のインタビュー・スクリプトで、敬体中心のやりとりでも、ときに常体にスタイル・シフトするケースを確認した。また、実際の授業活動中のインタビューのやりとりでも、以下のような例を示した。

留学生：[中国の英語教育事情について] あまり効率的ではなくて、ただ読むと、聞くとだけとか、書くのもあまり、よくないですね。

日本人学生：そうなんだ。

留学生：問題点。やはり外国語を勉強したら、海外へ行った方がいいですよ。

授業運営のための教材は、担当講師がプリントとして作成した。これは、授業内での討議内容や日程など、重要事項を確実に受講生と共有するためのものである。また、日本語表現の学習として、インタビューの文字起こし原稿から有効なものを選び出し、授業の中で活用するための教材としても使用した。以下は、日本人学生インタビューの有効なストラテジーの例を挙げ、その例について目上の人に話す場合を考えさせるためのプリントの一部である。追加質問で有効な表現「ちなみに、～って～ですか。」「さっき～って言ってましたけど、それは～」「～の話をちょっと聞かせてください」などを、敬語を使用すべき相手に対してはどのように言うべきか、という練習である。

B. インタビューで使えるストラテジー

* 相手が目上の人の場合、どう言い直せばいいか、考えてください。

(中略)

3. 相手の話の発展として、自分の話はせずに、相手の話の追加質問をする。

- ~さんにとってインドの魅力的なところって何ですか。
- ちなみに、休日が多いって、どのぐらいですか？
- さっき~って言っていましたけど、それは~
- ~の話をちょっと聞かせてください。

(8) 成果物中心の評価

受講生の評価は成果物中心であり、評価全体に対する割合は、インタビュー課題40%、メール課題20%、他の受講生へのフィードバック課題30%とした。その他に、授業の参加度を10%加えた。インタビューに関してはそれぞれ項目別に達成度を測り、構成(始まり方と終わり方の挨拶など)、インタビューとしての自然な流れ作り、追加質問などによる話の膨らませ方、適切な文体の選択、あいづちなど聞く態度の表明、理解しやすい語彙や文型の正確な使用、そしてわかりやすい発音・アクセント・イントネーションの使用などを、インタビューの段階ごとに評価した。メールと他の受講者へのフィードバックは、全体的な評価を与えた。特にグループによる社会人インタビューの場合、受講生個人への評価と、グループへの評価の線引きが困難になりかねない。そのため、インタビューの質問は一人ひとつとし、グループで質問を事前に検討することで、流れのあるインタビュー活動の中での個人の持ち場を明確化した。

4. 実践の成果と課題

4.1 実践後の反省

本授業の実践は筆者にとって新しい試みであり、授業準備やフィードバックなどに時間がかかる授業であった。幸い大きな問題もなく、受講生が話しやすい雰囲気の中で活発に授業活動に参加していたと思う。1学期のみの実施で成果を述べるのは早計ではあるが、以下にいくつかのポイントについて実践を振り返りたい。

(1) 授業外活動の運営について

学生主体の授業外活動ということで、インタビュー相手との日程調整が難航したり、行き違いで相手に会えなかったりという事態も起こりうる

考えていたが、幸い大きな問題は生じなかった。社会人インタビューは、図書館や教室など全て学内で行われたが、相手をしてくださった方々が北海道大学キャンパスの土地勘があったおかげで、大きな混乱はなかった。日本人学生からは特段に問題点の指摘はなかったが、留学生側が大人しすぎて困ったという報告と、逆に受講生側から、日本人学生があまりにも小さな声で録音が聴きとりにくく文字化が困難であったという報告があった。しかし、上級の学習者としては、相手に合わせた対応ができることを目標としている以上、多少のやりにくさは受講生自身で克服することを期待したい。ただし、受講生の評価の公平性という点に鑑み、難しいと思われるケースは評価の際に考慮した。

(2) 受講生による評価

授業の最後に、受講生に授業評価を課したが、授業担当者としての最大の収穫は、「たくさん日本語を話す機会をもらった」「対人関係による表現のバリエーションを練習することができて、とてもよかった」「特に普段お話しできない方とお会いできて楽しかった」「敬語の練習ができてよかった」など、受講生から言語学習の面や文化理解の面で得るものがあった、という評価を得たことである。以下は、受講生による授業評価の数値をまとめたものである。

表2 受講生による授業評価の概要

	質問項目	評価		平均
1	日本語力	5：上がった	1：下がった	4.2
2	進め方	5：速かった	1：遅かった	2.8
3	教材・資料	5：よかった	1：悪かった	4.3
4	授業準備	5：大変だった	1：簡単だった	3.1
5	宿題	5：多かった	1：少なかった	3.0
6	活動目的	5：理解できた	1：理解できなかった	4.4

大きな懸念材料であった、受講生の授業外活動に関する負担は、受講生の評価を見る限り、それほど大きくはなかった。設問4番の予習・復習が平均3.1、宿題量が3.0で、どちらも「普通」という回答である。特に、インタビュー後の文字起こしに時間がかかることを懸念していたので、安心材料である。提出された文字起こし原稿からは、受講生の語彙、表現、文法などについての勘違いが確認でき、講師主体の添削よりも効果があった

と認められるので、今後も継続していきたい。

日本語力の向上に関しては、個人差が大きかったと思う。回答が無記名なので、学生は特定できないが、1番の日本語力の向上につながったかという質問について、1名が3と回答していた。他は、4か5である。

(3) インタビュー相手としての参加者による評価

社会人インタビューの相手として参加していただいた方々へは、評価表記入をお願いしなかったが、活動終了後の会話では、学習者の前向きな態度や、相手の話を一生懸命聞く態度、丁寧な対応につき、良い評価をいただいた。例えば、「学生が一生懸命聞いている態度に好感が持てた」、「学生があいづちを使いながら話を引き出してくれたので、いい気持ちになり、話し続けられた」、「一生懸命敬語を使い、大変丁寧に話していた」といった評価を口頭でいただいた。「聞く」「聞きとる」ことを重要視した活動としては、良い結果が得られたのではないかと考える。

4.2 今後の課題

授業外活動を主軸とするカリキュラムは、さして新しい試みであるとは思えないが、日程の調整から話す前の状況づくり、話し終わりの区切りの付け方、事後のお礼など、まとまった活動を段階的に経験していく授業づくりは、筆者にとってはやや新規なデザインであった。そのため、反省も含め、今後解決すべき課題がいくつか挙げられる。

(1) 授業外活動実施上の日時決定

まず、授業外活動として外部の方々、特に社会人インタビューの相手をお願いするにあたり、時間などの設定が難しかった点である。多くの受講生が授業終了後の5時以降を希望するグループもあり、相手の方へのご負担が大きい形となった。インタビュー相手として参加予定の1名の方とは結局受講生との日程が合わず、急きょ別の方に参加をお願いすることとなった。改善案として、次の学期には授業時間内に相手の方々に来ていただくことを検討中である。

(2) Dropbox へのアクセス

授業内での録音などを共有する手段として、Dropboxは無料でもあり、ダウンロード速度も速く、便利である。しかし、受講生の中には既にファイルを多く保存して使用上限に達しているため、料金を払わないとアクセスできない人もいた。受講者同士でUSBなど記憶媒体を使用し対応した

が、更に便利な方法があるのでは、と他の方法を模索している。

(3) ふりかえり活動の多様化

ふりかえり活動の方法については、更なる検討が必要であると考えます。今回はふりかえり活動として、ペアやグループ内での添削や、講師からのフィードバックを活用した。受講生内の日本語習熟度に大きな幅があるため、日本人学生インタビューのふりかえり活動では、受講生間でのフィードバックが外的であったりする場面もあった。例えば、受講生の独り言など、敬体から常体への自然なシフトであっても、丁寧度に問題があると指摘する受講生もいた。そのため、社会人インタビューのフィードバックは、文字起こし原稿の一部をスクリーンに映し、講師が修正すべき箇所を色付けすることで、学生同士で話し合いの焦点を絞ったが、時間がかかるので、もう少し効率的な方法を考えたい。

(4) 受講生への評価項目の適切さと透明化

講師から受講生への評価の際使用した、「自然な流れ」「構成」といった項目別評価は、客観的な判断基準としては受講生の理解を得やすいものの、差がつきにくいという欠点があった。今回は、例えば「次の質問に移る際に、前の話をまとめられたか」「始めの挨拶が適切だったか」など、具体的な項目に関する達成度を中心とした評価にしたい。

(5) 受講生個々にとって学びの多い活動へ

今回は日本語習熟度の高い受講生が多かったため、モデルとすべきインタビュー例が頻出し、討議からも重要事項が抽出されやすかった。しかし、前述した通り、習熟度の高い受講生にとっては、必ずしも得るものが多い活動とは言いがたい。一方、習熟度の低い受講生にとっては、ピアや講師からのフィードバックが難しすぎなかったかという懸念も残る。必要に応じて、文法項目の復習用資料を希望者に配布したりなどしていたが、個々への対応は必ずしも充実していたとは言えない。どの受講生にとっても得るものが多いのは、モデルとすべきインタビュー画像であろうが、あまり授業で紹介する時間が取れなかった点が残念であった。特に習熟度が高い受講生の割合が低かったり、逆に高すぎたり、という場合のためにも、モデル会話の紹介は増やした方が良いように感じた。一般に、インタビューでは情報を聞き取る追加質問が重要である。聞く態度に関してはある程度学ぶ機会が得られたのではと思うが、上級者としては、内容を深める質問が、より意義深いやりとりにつながる。今回は、モデル会話を提示しなが

ら、追加質問の幅を広げる練習を組み込みたい。また、反応が少ないなど、インタビューが難しい相手への対応も、授業で練習を積みたい点である。

(6) より主体性のある学習者となるために

さらに大きな課題は、今回の授業設計が、結局は担当講師によって作られた枠組みであるということに関係する。理想的には、受講生が自ら設定したテーマに基づき、インタビュー相手を自ら探し、交渉して、インタビューするという活動が考えられる。しかし、週一回16週という時間枠が足かせとなる上に、受講生が相手と日程が調整できなかつたり、実現不可能な計画を立ててしまつたり、となる可能性もある。更に学習者の主体性育成のためには、どのような形態が可能なのか、検討の余地はあると考える。

以上のような点に注意し、今後より良い授業活動となるよう工夫していきたい。

注：

- 1) 他の上級やりとり授業の目標と到達目標の概略は以下の通りである。
「ロールプレイ」では、相手への配慮を重視し、場面に適切な語彙・表現を選びながらやりとりを進めることを目指し、「ディベート」では、相容れない話題や場面の中で、各自の意見を出し合い、まとめることを目標としている。

謝辞：

今回の授業活動につき、日本人学生インタビューの参加者募集にご尽力いただいた、高橋彩先生、青木麻衣子先生、新渡戸カレッジのスタッフの方々、日本人学生の方々に、心からお礼申し上げます。また、社会人インタビューでご参加いただいたの方々へも、深く感謝いたします。

参考文献

- 『インタビュー実践！レポート・プレゼン・就業力』亜細亜大学経営学部
初年次・基礎教育委員会、翰林書房、2015年
- 『Voices from Japan ありのままの日本を知る・語る』永田由利子、くろしお出版、2016年
- 国際交流基金 2015 『J F 日本語教育スタンダード』

https://jfstandard.jp/pdf/jfs2015_pamphlet_ja.pdf
ACTFL Proficiency Guidelines 2012 日本語スピーキング

<https://www.actfl.org/publications/guidelines-and-manuals/actfl-proficiency-guidelines-2012/japanese>

えんよ ゆみこ (国際教育研究センター非常勤講師)